

マナー教育の必要性と教育者の役割

井上宏 大阪女子短期大学

1. はじめに

まず、一つのエピソードから始めよう。過日、ある関西の4年制大学の先生から次のような話を聞いた。その大学で新入生歓迎行事をホテルで行ったところ、開始ほどなく学生が床に座り始め、その中の幾人かがカーペットでタバコの火をもみ消したため、ホテル側から痛くおしかりを被ったと。

最近街角で若者たちが地べたに座り込んでいる光景を多く見かけるようになったが、本学でもこの一二年、学生が廊下に座り込むようになった。講義が長引いて休み時間に食い込んだりすると、その教室の前は座り込んだ学生で溢れ、通りにくい状態になる。研究室の前で座り込んで教員を待つ学生も多い。注意をすると、渋々立つのだが、目を離すとまた座っている。なぜ注意をされなければならないのかを彼女らは理解できないのだ。

本学では、ビジネス入門教育の一環として、また、就職対策として、ビジネスマナーに関する教育を行っている。

ビジネスマナーの教育も、日常生活におけるマナーについて、ある程度の常識が学生に備わっていることが前提である。しかし、最近の学生はその前提をほとんど満たしていない。学生の日常生活のマナーが崩壊し、ビジネスマナーとの隔たりが余りにも大きい。まず、学生生活に必要なマナーから教育する必要があると感じる。

ところで、マナーとは何か。マナー、エチケット、プロトコール、日本語では礼儀、作法、様々な言い方がされている。寺西千代子は、昔は国家間の公的な儀礼の問題をプロトコール、私的な行儀・振る舞い方をマナーやエチケットとして区別していたが、最近はプロトコールもエチケットも同義語に使っているのが実情だと言う¹⁾。

いずれにせよ、人が共同生活を行っていく上で、良い関係を築くためのルールであり、技法であるが、その本質は、「相手を大切に思う心」「他人への思いやり」である。「皆が、他の人に心を配って、お互いなごやかに暮らしていこう」ということである。その「心」が「形」に現れたものがマナーであり、作法である²⁾。それは、学生生活でもビジネス社会でも変わらない。

日常生活のマナーに関する教育は、その性格上、子どもを取り巻く全ての大人たちが担わねばならない。

ところが学生を見るに、彼女らは家庭でも学校でもマナー教育らしいマナー教育を受けてこなかった。マナーには必ず、そのような「形」がとられる「理由(こころ)」がある。学生は「形」も十分に教えられていないし、ましてや「理由」を教えられていないので、

どうすれば良いのか、なぜそうしなければならないのかが分からない。

本論は、若者のマナーが何故このような危機を迎えてしまったのか。このような事態を前にしてマナー教育はどうあるべきかについて考察するものである。

マナーはそれぞれの時代に適応しながら、世代から世代へ継承されていくものである。社会の急激な変化によりマナーのあるべき姿が変容しつつある中で、今や我が国では、若者を教育すべき立場にある世代自体がマナーの真の意味を見失い、次代に伝える術を失っている。そこに問題の本質がある。

以下の章で、筆者は、教育者が学習者と共にあるべきマナーやマナーの意味を探索し、そして実践することが必要ではないかということの問題提起し、また、その方策について考察を行うつもりである。

2. マナー教育の日本的特質

言葉を覚えたチンパンジーとして有名な犬山・京都大学霊長類研究所のアイが、初めての子どもアユムの子育てに励んでいる姿がNHKテレビ³⁾で紹介された。その姿に学習というものの本質を見ることができる。アイは自分がコンピュータ学習をしている姿をアユムに見せるが、決してアユムの手を取って教えることはない。アユムは母親の姿を懸命に観察しながら真似ようとする。まさに「学ぶ」は「真似ぶ」だといわれるそのままの姿である。チンパンジーがアブラヤシの実を石で割る文化の継承について、アフリカ・ギニアのボツウ村で観察された姿もそのようなものであった。

「模倣」が日本の「学び」の伝統であると辻本雅史はいう⁴⁾。また、東洋(あずまひろし)は日米の育児を研究して、アメリカの母親が「教え込み型」育児であるのに、日本の母親は「滲み込み型」育児であるという⁵⁾。アメリカの母親が、言葉による分析的で組織的な教え方をするのに対し、日本の母親は、言葉で意味や理論を理解させるよりも、直接自分でやってみるといった実践的な教え方をするという。

なぜそうなったかについての筆者の推論はここでは措くとして、日本の家庭教育は、霊長類が獲得した子育ての方法の自然な延長線上にあると考えられる。一方、アメリカの家庭教育の方法は、そのまま学校教育の原理につながっている。

東によれば、「教え込み」は、基本的に子どもは教えられることによって学ぶという前提に立つ。そして、<教える - 教えられる>という関係をつないでいる手段は「言葉」である。これに対し、「滲み込み」は、模倣および環境の持つ教育作用に依存する。環境が整っていて、よいモデルがあれば、子どもは「自然に」学ぶという前提に立つ。

辻本雅史は「滲み込み型」教育モデルが、日本のほとんどあらゆる伝統的な学びの場において、教育や学習の原理として生きていたと主張する。また、本来「教え込み型」の方法を原理としている現代の学校教育の中に、気付かないまま「滲み込み型」学習文化の伝統が生きていると主張する。

辻本は、近世前期の儒者貝原益軒の学問と思想の中に「滲み込み型」の教育思想がはっ

きりと語られていると言う。

益軒は「予(あらかじめ)する」という言葉で、子どもが生まれて悪に移ってしまう前に、早く子どもに教えなければならない、という一種の「早期教育」を主張した⁶⁾。また、子どもが「見ならい、聞きなら」って、それに「似する」という過程、いわば子どもの模倣する力こそ、人間形成の決定的な要因であると指摘している。そして、「教える」ということは、何事かを積極的に教え込むのではなく、実際には良くないことをすれば「戒める」ということによってなされる。子どもは自らの活動を通じ、「見ならい、聞きなら」いながら、自力で学んでいく。そのためには、学ぶ側に学ぼうという「立志」がなければならない。また、教える側(師匠)は「子どもの見ならう所の手本」でなければならない。

益軒の教育においては、子どもが自らする模倣と習熟の過程こそが重要である。「見ならい、聞きならい」する活動が、無自覚な習慣になるまで繰り返されることによって、身の内にしっかりとしみ込む。つまり、言葉による意識の回路を通さない、言葉によって意識化される知とは異なる、ある種の「身体知」の獲得を目指しているといえる。

益軒は、人間社会における、人の「他者」に対する正しい関わり方を、「礼」として、「日常に即した身体作法」として説く。心を正しくするためには、外に現れたさまざまな身体上の規律を、「礼」として、日々実践することが重要であると説く。

辻本は、この「身体の規律化」「身体から心へ」の方法原理が、家庭教育ばかりでなく、日本の学校における「校則」の根底にあり、学校教育の目的である「知育」と「徳育」の、後者を支えるものとしての位置づけを担ってきたと見る。また、この「しみ込み型」の原理が、権威主義を嫌う、教師と子どもの「友達関係」に影響してきたと見る。

3. マナー教育の崩壊

ここに来て、疑問が生じてくる。現在の日本の親たちが、教師たちが、そして職場の先輩たちが、マナー教育において、「しみ込み型」教育の良き模範となっているだろうか、「教え込み型」教育に必要な「言葉」を持っているのだろうか。また、教わる側の子どもたちに「立志」があるのか、人生の先輩たちを模倣の対象と見ているのだろうか。さらに、先輩から引き継いできたマナーそのものが、グローバル化の嵐の中で、そのチェックに耐えられるのだろうか。

ここでまた、冒頭の座り込みの問題に帰ってみる。筆者は本学併設高校の若い教員と食堂や連絡会、時には飲み会などで話をするので、この件について意見を聞いてみた。「そんなに悪いことですかねえ」という人がいる。「彼女らも邪魔になったら立つでしょうし、最近は廊下も道もきれいですからね」と言う。生徒の髪の色についてもそうだ。「確かに、校則では染髪禁止になっているが、このご時世では髪の色まで余りうるさく言えない」とのことだ。彼らも遅刻やタバコなどについては厳しくチェックしているようだが、規律というものに対する意識がずいぶん違うのだ。若い教師たちを観察していると、箸やペンを正しく持てない人がいる。

日本経済新聞に「職員室」というコラムがあるが、そこでも教師自身の口から、教師の服装の乱れや、教師が自分の子を休ませて行楽に行った話などが語られている⁷⁾⁸⁾。

日本も高度成長期までは、家族がそろって食事することは普通だった。テレビもまだ普及しておらず、その日の出来事を話しながら食事をした。食事が終われば、家族が皆同じ部屋で団らんをしたり、子どもたちはちゃぶ台で宿題をした。子どもの数も多く、兄弟姉妹で一つの社会ができた。そこでは、親から子へ、兄から弟へ、「滲み込み型」のしつけ教育があった。それが、高度成長期以降は、家族はすれ違い。食事バラバラで、たまに一緒にしても、目はテレビに釘付けで、ろくな会話もない。食事が終われば、子どもは子ども部屋に引きこもってしまう。そんな家庭が多くなった。「滲み込み型」しつけができる環境ではなくなった。では、学校でそれを補うしつけ教育があったかという点、徳育のための十分な教科もなく、教条化した校則による締め付けがあっただけだ。

今の若い親や教師たちの成長期は既にそんな時代に突入しつつあった。きっちりした「しつけ」を受けていなければ、子どもにきっちりした「しつけ」をすることは難しい。もちろん、そんな中でも立派なしつけを受けた人も多い。しかし、その人たちも、子どもから、どうしてそうしなければいけないのかを問われたとき、説明できる言葉を持たない場合が多い。子どもの側も年長者を今や模倣の対象と見ていない。彼らの模倣の対象は商業主義に侵されたテレビ画面上の仮想現実である。

日本には小笠原流礼法や、茶道など立派なマナー教育の伝統があるにも拘わらず、それらは今や、企業研修や就職対策教育、冠婚葬祭マナーなどの箱庭の世界に閉じこめられ、日常生活の中に根付いていない。

その上に、グローバル化の波である。海外との交流の必要から国際儀礼(プロトコール)修得の必要性が叫ばれる。日本の伝統作法とプロトコールの断片的知識がぶつかり合い、混乱している。しかも、「形」のみが一人歩きし、「こころ」が忘れられている。接客のアルバイトで与えられる奇妙なマニュアルが学園までも汚染している。マナー教育の崩壊である。

マナーおよびマナー教育の崩壊については、さまざまの原因が語られている。おそらく、それらのほとんどが真実であり、複合汚染なのだろう。しかし、その大きな原因が教える側にも存在するとすれば、マナー教育を復権させる方策はあるのだろうか。

また、若者にマナー学習への「立志」がないように見える。「立志」は、本来外部から強制されてできるものではない。若者の中に「立志」を内発させる工夫はあるのだろうか。

4. マナー教育の復権

学ぶ側の「立志」ということに関して、稲垣佳世子と波多野誼余夫の日常的認知からの研究がある⁹⁾。両氏によれば、伝統的学習観では学び手が受動的な存在であり、しかも有能でないという仮定をおいているが、日常認知研究から見た新しい学習観では、子どもはもっと能動的で、有能な学び手である。意味のある課題に取り組む中で、技能に習熟する

ばかりでなく、概念的知識をも獲得していくとする。「教え込み型」と「滲み込み型」に相似する考え方といえる。しかも、益軒が「立志」を問題としているのに対し、両氏は、より積極的に、それが始めから子どもに備わっているものとして、その能動性や有能さを引き出す教育を提唱している。

両氏は、その方法として、子どもが学ぶべき事柄に関して既有知識を持っている場合は、「まちがうことを尊重する」「探索することを奨励する」「子ども同士のやりとりをうながす」などの方策を用い、既有知識を持たない事柄に関しては、「媒介物による日常生活化」によって具体的イメージを持たせ、また、「教師も答えのわからない問題に取り組む」ことによって、教師も生徒も一体になって活動に打ち込むことを提唱している。そして、その際重要なのは、教師の「教育的創造力」であるとしている。

筆者は両氏のこの理論が、短期大学におけるマナー教育において大いに参考になると考える。「立志」に関して言えば、最近の学生はマナーに無関心に見えるが、適当なきっかけがあれば関心を寄せるのではないかと考える。就職活動はそのきっかけになりうる。普段マナーを拒絶している学生も、就職活動のためということであれば、マナー教育を受けることに納得する現状がある。これを利用して、就職活動を契機として、学生生活も含めた日常生活に必要なマナーについて、学生自身にその大切さを気付かせ、能動的に学習させることが可能なのではないかと考える。つまり、「就職活動のためのマナー教育」ではなく、「就職活動を契機としたマナー教育」ということである。

また、学習の方法に関して言えば、マナーにも、学生が自身の日常生活から類推して、どうすべきか判断がつきやすいもの、かなり人生経験のあるものでも容易には判断のつきかねるものなど、いろいろある。事柄によって学習の方法は変わってくるはずである。

もはや、理屈抜きで体に覚えさせる完全な「滲み込み型」教育は難しい。参加型学習法などで、学生がその日常生活から判断のつきやすい問題については、教師はファシリテーター（森 良は産婆役と定義づけている¹⁰⁾）に徹し、学生自身の気づきに任せればよい。しかし、判断の難しい問題については、教師も学習者として積極的に参加するなどの工夫をすることが有効であろう。特に、社会状況の急激な変化により、伝統的マナーがその有効性を失っていると考えられるような事柄や、国際プロトコルを考慮しなければならないような事柄については、教師も学生も相当の下準備をして学習に参加しなければならないだろう。いずれにせよ、参加型教育を主体にしつつ、時には「教え込み型」教育も併用する必要があるが、そのためには、教師は学生を納得させるだけの明瞭な言葉を獲得しておかねばならない。現在の教師は、不十分ながらも前の世代から「滲み込み型」教育を受け、ある程度のマナーを獲得し実践している場合でも、それを次世代に引き継ぐべき言葉を持っていないからである。

マナー教育は、もちろん、社会全体で行うべきものであるが、少なくとも短期大学において、どのような実践があり得るか、次にいくつかの事例を通して考えてみよう。

5 . 事例

(1) 電話の切り方

非常に単純で、学生の日常経験からすぐに答えの出せる問題から始めたい。電話を切るのは、かけた方からか、受けた方からか、ほとんどの学生はこの単純な問題にもマナーがあることを意識していない。学生は頻繁に携帯電話を使っているが、この質問を受けて、即座に明確な答えを出せる学生は少ない。「じゃあね～」「じゃあね～」と挨拶を交わして無意識に切っているが、どちらが先に切るかは、どちらが急いでいるか、どちらがせっかちかによる場合が多い。中には、そう言えばかけた方から切っていると答える学生もいるが、その理由を問うと、かけたのはこちらだからと答えにならない答えが返ってくるのがほとんどである。しかし、しばらく学生同士に話をさせると、「用件が終わったかどうか、分かるのはかけた方だから」とか、「まだ他にも話があったのに、話の切れ目に、受け手が先に切ってしまうて困ったことがあった」と言う学生が出て、皆が納得の境地になる。この間、教師が話に介入する必要はほとんどない。せいぜい、それではかけ手はどんな話し方をすれば、受け手がせっかちに切ってしまうことを防ぐことができるか、問いかけてやればよい。そうすると又、学生たちから「電話の最初に、いくつ用事があるかを言っておけば良いのではないか」とアイデアが出てくるはずだ。このように、学生の日常経験から推測できるような問題については、学生同士で話をさせると容易に正しい答えが出てきて、なぜそのようなマナーが生まれたのかを納得させることができる。しかし、マナーはそのようなものばかりではない。我々も少し深く考えてみないと人を納得させる言葉を見出せないものもある。次にまた、廊下での座り込みの問題を取り上げてみる。

(2) 廊下での座り込み

過日又、本学でひどい例を見かけたのだが、廊下で学生たちが車座で座っていた。よく見ると、なんとコンビニの弁当を広げて食べていたのだ。筆者は近づいて「君らは汚いことをして…。そこは私が先ほど犬の糞を踏んだ靴で歩いていたところだよ」と言った。学生たちは「ウソ！」と叫んだり、「先生に注意されたのは3べん目だ」などと笑ったりしながら、なんとか立ち上がった。筆者も急いでいたのですぐその場を離れ、廊下を曲がり際に振り返ると、学生たちはやれやれとばかり、また座り込んでいた。筆者の注意を悪い冗談としか受け取っていなかったのだ。

そこで、別の学生たち対象であるが「秘書実務」の時間に、この問題について話し合ってみた。「食堂まで遠いから」とか、「食堂が混んでいるから」別に良いじゃないかと言う学生も少数いたが、やはり、「廊下はきれいに見えても汚い、トイレに行った靴で歩いているのに」とか、「歩く人の邪魔になるからいけない」という、まっとうな意見が出てきて、やめるべきであるという結論に達し、筆者も胸を撫で下ろした。そして、「廊下はあくまで、歩く場所だ。教室と教室を結ぶ通路だ。道路交通法でも、第76条4項で『何人も、次の各号に掲げる行為は、してはならない』として『道路において、酒に酔つて交

通の妨害となるような程度にふらつくこと。道路において、交通の妨害となるような方法で寝そべり、すわり、しゃがみ、又は立ちどまっていること。交通のひんぱんな道路において、球戯をし、ローラー・スケートをし、又はこれらに類する行為をすること』などが禁止行為として定められている」と解説をして終わった。

しかし、筆者は実はこれだけではどうも納得できない思いを持っていた。筆者が心情的に学生の廊下での座り込みを許せないのは、単に不潔だから、通行の邪魔になるからだけだろうか、どうもそれだけではないという思いがあり、今少しこの問題を分析してみることにした。

その結果、結論に達したのは、廊下で座り込む姿は、学校で勉強をする心構えをつくるための身体のあり方（身体規律）から余りに遠いということである。何事をするにも、その心構えが必要だということは誰も異論がないだろう。その心構えをつくるのは身体である。小笠原流礼法では姿勢のことをやかましく言う（「胴作り」という）。筆者は服装や化粧など身だしなみも含めた、辻本雅史の言う「身体規律」が大切だと考える。筆者はそれを「心構え」に対比して「身構え」と呼ぶと語呂がよいと思う。（「身構え」を角川国語事典でひくと「敵・相手に対してとる攻撃・防御の姿勢・態度」と出てくるが、物事に対する姿勢・態度という意味でこの言葉を使いたい）。講義と講義の間の休憩時間は次の講義に移るための準備の時間である。廊下に座り込んでしまうのは決して準備の姿勢ではない。学校に勉強をしに来ている限り、勉強をするための「身構え」「心構え」が欲しいのである。このことは、学生の学校における身だしなみについての考え方にも関係してくる。次にその点について検討してみる。

(3) 学校における身だしなみ

服装を変えたときの気分の変化については誰しも身に覚えのあることだろう。それだからこそ、制服というものがあり、逆に、ビジネスマンの制服たるネクタイ・背広を禁じるカジュアルデーの登場などがあるのだ。

本学は一応制服を定めているが、普段の通学については自由である。従って頭のとっぺんからつま先まで様々で、驚くような姿も散見される。これについては、授業の中でなかなか学生同士の討論は難しいので、まだ実現していない。学生同士では遠慮があるからである。そこで、個別に話をしてみると、自分はそんなに極端な姿をするつもりはないし、確かに一寸どうかと思う人もいるけれど、他人に迷惑をかける訳ではなし、自由で良いではないかという反応が多い。学生の間からは前述の「身構え」「心構え」論らしいものは出てこない。しかし、実際はこれほど勉強の「心構え」に影響するものも少ないはずである。

過日、NHK BS 特集「IT革命の未来図 - アメリカビジネスはこう変わる - 」が、ダークスーツ姿で有名だったアメリカの金融街ウォール・ストリートで、服装がずいぶん自由になってきたという話を紹介していた¹¹⁾。IT産業に優秀な人材が流れるのに対抗す

るためだという。しかし実際は、半袖シャツやジーンズは駄目など、許される限度が企業毎に非常に細かくマニュアル化されているということだった。働くための服装にはやはり一定の節度、「身構え」が要るのだ。カジュアルデーにしても、自由な発想をするための「身構え」を要求しているのに他ならない。

(4) 授業中の帽子着用

時々、授業中に帽子をかぶっている学生がいるので、その都度注意をし、脱帽させている。ある時、注意をすると「国際プロトコールでは、女性は室内でも帽子を着ていて良いそうです」と、脱ごうとしない学生がいて驚いた。筆者は、「日本では、室内では帽子を脱ぐのが普通だ。企業の応接室などでも、そのために帽子掛けが置いてあるところが多い。ましてや、ここは教室だ。そんな顰広の帽子をかぶっていると、後ろの人が黒板を見にくくなるし、俯いていると教師も学生の表情が見えない。教師は学生の反応を見ながら授業をするのだから、帽子は困る。プロトコールでの女性の帽子着用については、細かい点を承知しないので、また調べておくが、それよりも、自分の行為が他にどんな影響を及ぼすかを考えて欲しい」と言って、脱がせた。国際化の時代は学生を納得させるにも色々な知識が要求される。帽子のことについて、筆者が学生から与えられた課題として調べてみた。

帽子というのは現代の日本人には余り馴染みがない。しかし、源氏物語絵巻などを見ると、確かに登場人物が皆、室内で帽子をかぶっているように見える。日本人と帽子の関係はどう変化してきたのだろうか。西日本帽子産業協同組合連合会のホームページ¹²⁾によると、帽子の役割には、頭を守るため・身分を表すため・おしゃれのためなど様々あるが、日本では、昔は身分階級を示すため冠や烏帽子が用いられ、頭を守るため兜が戦場で用いられ、することが多かった。しかし、それらも近世になると廃れ、身分や職業を表すものとしては、髷が大いに発達した。本格的に帽子が使われるようになったのは、やはり明治になって、欧米からもたらされてからのことで、一時大いに流行したが、また戦後はあまり用いられなくなってしまったようだ。明治5年に洋式礼服が採り入れられたときも、帽子に馴染みのない日本人への教育のため、大礼服制の公布も絵図入りでなされ、注意書きとして「冠を脱せざるを以て礼となし、帽子は脱するを以て礼と定むべし」と丁寧に脱帽姿まで描かれていたとのことである。つまり、帽子は脱ぐのが礼儀なのである。

では、女性の帽子はどうか、外務省編集の「国際儀礼に関する12章」¹³⁾では、夜のロング・イブニング・ドレスや、ディナー・ドレスでは、帽子は不要、昼のロング・ドレスやデイ・ドレスでは、スポーティ以外のものなら良いが、なくても良い、となっている。つまり、公式には帽子不要なのだが、昼は紫外線から女性の肌を守るために着けても良いことになったと察せられる。

では、なぜ帽子を脱ぐことが礼になるのか、筆者はお辞儀と同じ心理的ルーツを持っていると考える。帽子は元来、人間にとって一番大切な頭を護るものである。それを脱ぐということは、相手に対する信頼を表すことであり、また、相手に対し攻撃の意図を持って

いないことを表明することでもある。お辞儀も、相手に対し自分の大切な頭を任せる姿勢をとるということであり、深くお辞儀するほど頭は無防備になるわけだから、より信頼の程度が大きいことを表すことになる。因みに、西欧の挨拶である握手は、手に武器を持っていないことを相手に見せる意味があると筆者は考えている。

以上から、教室の中でおしゃれのために帽子をかぶるのがプロトコルの趣旨に適っているとは考えられない。病気で脱毛しているとか、よほど事情のない限り帽子は禁止されるべきであるというのが、学生への答えである。

以上、筆者の遭遇した問題について、学生自身に考えさせ、学生と共に学習し、または筆者に与えられた課題として学習した結果のいくつかを、事例として挙げた。全てのマナーについて、このように検討することは時間的にとても許されることではない。しかし、いくつかでも試みることによって、マナーには、その拠って来る理由（こころ）があることに、学生が気付くことを期待したい。次に、その際の教師の役割について確認したい。

6. 教師の役割...「日常的認知の限界」の打破

学生同士の話し合い（あえて、討論とは言わない）でも、教師が参加した場合でも、話し合いの基盤となる知識が、自分たちの狭い経験の範囲内に限定されてしまう危険性がある。それを打破し、より広く深い観点からの検討を可能にするのが教師の役割である。日常生活で獲得される知識には限界があるからである。

稲垣佳世子は、日常生活で学ぶ知識は、概念的知識の欠如や未発達から、理解が浅いという限界を持つと言う¹⁴。そして、その原因として、日常生活では理解よりも「うまくできる」ことに価値がおかれやすいこと、日常生活における以心伝心的なコミュニケーションが、深く理解することを妨げ、概念的知識の獲得を抑制している可能性があることを挙げている。

稲垣は、「日常生活においては、人々が、能動的で有能な学び手であるとはいえ、意図的に教えられることなしに獲得しうる知識には、どうしても限界がある」。したがって、「日常生活で身につけた技能を、他の文脈に適用したり、異なった制約条件に合わせて修正する。これまでうまく働いていた手続きについて、なぜそれでよいのかを内省する。さらにまた、質疑や討論などを通じて概念的知識を吟味の対象とする - 日常的認知の限界を克服するためには、こういった場が欠かせない」と述べている。まさに、このような場を創造的に作り出すのが教師の役割であろう。

ところで、この「日常的認知の限界」は学生だけでなく、親や教師についても当てはまることである。筆者は、親や教師がマナーを子どもに伝える「言葉」を持っていない理由はここにあると考えている。彼らは「滲み込み型」しついで、不十分ながらも先輩世代からマナーを受け継いだ。しかし、それは以心伝心的コミュニケーションで伝えられ、それで今まで何とか上手くやってきたので、「身体的規律」とはなっていないも、概念的知識としては浅くしか理解していない場合が多い。それでも、次の世代にも「滲み込み型」しつ

けのみでマナーを継承していけるなら問題ない。いまや、それができる環境は失われ、なぜという「言葉」が要求されるとき、彼らは戸惑ってしまうのである。親や教師は、子どもを導くための「言葉」を獲得せねばならない。それが、筆者の主張である。

もちろん、言葉による理解にも限界がある。マナーは意識せずに行えるようになってこそ本物であり、最終的には学生の「身にしみ込む」ことが必要である。そのためには、学習方法に関する教師の創意工夫が欠かせない。

7. 終わりに

以上、昨今のマナーの乱れやマナー教育について、若干の事例を含めて考察してきた。若者のマナーの乱れは間違いのない事実である。その原因は様々であるが、今まで述べたごとく、家庭・教育者・企業人など、若者を教育すべき立場にある世代の多くがマナーの真の意味を見失い、次代に伝える術を失っていることに大きな問題がある。従って、教育者が学習者と共に、あるべきマナーを再発見・再構築しなければならない。

しかし、もっと根本原因は、欲望と競争を際限なく煽ることによって動いている、この社会の仕組み、その裏に潜む経済成長至上主義の哲学にあるのかも知れない。若者の多くはその中で、未来に対する夢を失い、自己中心的な目先の欲望を追求し、他者に対する感受性を失ってしまったのかも知れない。このような社会の仕組みや哲学の問題は、「マナー教育」を考える今回のテーマと、実は密接に関係している。江戸時代、石田梅岩は「先も立ち、我も立つ」人間関係のあるべき姿をたえず探求し実践して、石門心学として結実させた。筆者は本研究集録第5号において、「働く意味をどう教えるか」というテーマの下に、この石門心学について若干触れた。マナーとの関連においても追求すべきことと思われるが、ここではこれにとどめる。

<注>

- 1) 寺西千代子、「国際ビジネスのためのプロトコール」、有斐閣ビジネス、1985
- 2) 小笠原敬承斎、「小笠原流礼法入門 - 美しいふるまい」、淡交社、1999
- 3) NHK、NHK スペシャル「ことばを覚えたチンパンジー・アイちゃんの子育て日記」2001.5.5
- 4) 辻本雅史、「『学び』の復権 - 模倣と習熟」、角川書店、1999
- 5) 東洋「日本人のしつけと教育 - 発達の日米比較に基づいて - 」、東京大学出版会、1994
- 6) 中村学園大学、インターネット・ホームページ「貝原益軒・和俗童子訓(デジタル版)」、www.lib.nakamura-u.ac.jp/kaibara/doji、2001
- 7) 日本経済新聞、「職員室『先生、服装乱れていませんか』」、日本経済新聞朝刊、2001.7.21
- 8) 日本経済新聞、「職員室『学校なんか行かなくていい?』」、日本経済新聞朝刊、2001.7.28
- 9) 稲垣佳世子・波多野誼余夫、「人はいかに学ぶか - 日常的認知の世界」、中公新書、1997

- 10) 森良、「ファシリテーターの果たす役割と、求められる理由」、日本秘書教育学会秘書教育研究第9号、2001
 - 11) NHK、BS 特集「IT革命の未来図 - アメリカビジネスはこう変わる」、NHK、2000.10.15
 - 12) 西日本帽子産業協同組合、インターネット・ホームページ「Hat & Cap『帽子100年』」、www.hatandcap.or.jp/、2001
 - 13) 外務省外務報道官編、「国際儀礼に関する12章」、世界の動き社、1992
 - 14) 稲垣佳世子・波多野誼余夫、前掲書
- <参考文献>
- 1) NHK作法の極意制作グループ編、「作法の極意」、NHK出版、1997
 - 2) 松沢哲郎、「チンパンジーはちんぱんじん」、岩波ジュニア新書、1995
 - 3) 井上忠、「貝原益軒」、吉川弘文館、1963
 - 4) 矢橋昇、「社会生活のスキルとしてのマナー教育を考える」、日本秘書教育学会秘書教育研究第9号、2001
 - 5) 加藤秀俊、「衣の社会学」、文芸春秋社、1980
 - 6) ロバート・N・ベラー他、「心学が拓く二十一世紀の日本」、心学参前舎、2001

以上